# 100周年への道(1) 召命、使命、カリス マ

地域総会から始まった創立 100周年に向けた準備期間に おいて、属人区長は私たちに オプス・デイのアイデンティ ティ、歴史、そして使命につ いての内省を促しています。 このシリーズは、その本質的 な側面の一つである仕事の聖 化を通じてカリスマを深く掘 り下げることを目的としてい ます。最初の記事では、教会 におけるオプス・デイの特異 性を探求し、日常生活という コンテクストにおける召命と

使命の概念の理解を深めま す。

2024/10/04

#### 概要

人間一人ひとりに対して神が準備し ている計画について内省するため に、召命と使命の概念について考察 する。聖ホセマリアの召命とオプ ス・デイの使命を、その神学的・教 会的な枠組みを強調しながら提示す る。聖ホセマリアの説教が、仕事と 日常生活の中での召命と使命につい て語っていることを理解し、そこか ら結論を引き出す。その後、この新 しく創立されたオプス・デイの使命 の目的を徐々に明確にし、主がなぜ これを望み、霊感を与えたのかを問 う。その際、特に聖ホセマリアのテ キストを引用する。イエス・キリス

トの教会の普遍的な使命という枠組 みの中で、オプス・デイの特異性に 焦点を当てる。オプス・デイの使命 の中心には「仕事は聖化できるもの であり、また聖化〈する〉ものであ る | という明確なビジョンがあるこ とを認識する。次の章で展開される その他のテーマを紹介し、オプス・ デイの精神の多くの特徴が、その人 間的・神的な「仕事の中心性」から 生じることを示す。オプス・デイへ の召命がキリストおいて働くことへ の明確な呼びかけを必要としている ことを理解する。最後に、使命は組 織制度に先行すること、そして原則 として、オプス・デイの使命は、神 から受けた特有の使命を果たすこと を可能にする限り、様々な組織形態 と両立し得ることを述べる。

#### I. 召命、使命、カリスマ

初めに御言葉があった。すべては御言葉において、御言葉を通して作られた。すべての存在するものは神によって〈呼び出された〉。

神の豊かな命は、父と子と聖霊、つ まりペルソナの関係である。御父は 御子を生み、聖霊は御父と御子から 出る。このように三位一体における 出生・発出はペルソナを終点とす る。神は創造するにあたって同じ論 理に従う。つまり神は御前において 人格的存在(つまりペルソナである 私たち一人ひとり)が「いる」こと を望むのである。この人格的存在の モデルは御子であり、愛によって創 造される。神が宇宙全体を「存在し へと呼び出すのは、神の命に参与す る人格的な存在を望んでいるからで ある。神を知り、愛することのでき る自由な存在を。

このように、ある意味世界全体は召 命の結果である。私たち一人ひとり は個人的に「存在」へと呼ばれた。 それぞれが神の「あなた」の前に固 有の「私」を持っている。固有の 顔、固有の声を持っている。だか ら、神が世を望み、創造したのは、 私たち一人ひとりを思ってのことで ある。

#### 召命:恐れから喜びへ

聖ホセマリアの説教は、私たちに 「召命」という言葉を身近なものに し、その偉大さと普遍性を示してく れる。オプス・デイ創立者は、第二 バチカン公会議前の召命がより限定 的に理解されていた時期に、人々が 召命について語ることに貢献した。 彼が行ったのは、多くの聖人の教え を取り戻し、召命をすべての人間に 共通するものとして再び明確に語る ことであった。

『道』の項目や聖ホセマリアの説教 で「召命」という言葉に出会うこと は、最初にある種の恐れの混じった 驚きを引き起こすかもしれない。し かしその直後に、彼がそれを語るコ ンテクストが日常生活、つまり勉強 や仕事、友情や家族、文化的情熱や あらゆる職業であることを知ると喜 びが湧き上がる。このように理解さ れると、召命は一見すると重要では ないように見えるものに光と重要性 を与えるのである。聖ホセマリアの このメッセージのおかげで、「召 命 という言葉は、多くの男女に

とって親しみ深く、父性的で、身近な言葉となった。

#### 例外はない

聖ホセマリアの説教を聞いた多くの 人々は、神の呼びかけに応えるため に必ずしも自分の社会的地位や仕 事、日常や家族の状況を変える必要 はないと彼が強調することに驚き、 喜んた。この呼びかけはまさにそ こ、現代の男性や女性の普通の生活環境で響く。

召命についての聖ホセマリアの語り 方は、深い聖書的な枠組みに基づい ており、一般的な神学概念の個別具 体的状況における価値を明確にし た。神はすべての人間に対し、ご自 身を知り、愛するように呼びかけて いるのである。私たちは皆、神の御 子と一致し、神の霊に参与する召命 を受けている。そのために、私たち は存在し、生きている。すべての人 が、例外なく:健康な人も病人も、 富裕な者も貧しい者も、労働者も知 識人も、多くの才能を持つ人もそう でない人も。

キリストにおいて創造された私たちが、創造主を知り、愛し、人となられたその御子に似るようにとの召命は「聖性への召命」と呼ばれる。それによって唯一の聖なる方である神の命に参与するからである。すべて

の人間はこの召し出しを受けている。すでに神の民である教かろうと、まだそうでなかること、神は誰も除外するこを与れている。神はこれでいる。参りに、そのからと、まうにといって陰のでは、まったとは、まったとして、自身に、自身に、復活したのである。

同時に神が呼びかけるとき、それは常にある使命、すなわち任務をある。救いの歴史におる。救いの歴史にるが表れているこれは明確に示されて「行行るようには多れをせよいを出発すると言れるがはいるのためにあなた創造したのと言ってででいる。実際、それらの具体的なすが、創世記にある創造主が人

に託した元来の使命の具体化であると言える:「神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」(創世記2・15)。

聖性への普遍的な召命には、同じく 普遍的な使命が対応する:それは御 子の姿に倣い、兄弟愛と子としての 愛をもって愛し、罪の行いを拒むこ とである。御子と一致するとは、そ の使命に参与することであり、つま り人間の罪によって乱れた世界の秩 序を取り戻し、聖霊においてそれを 御父へと導くことである。そのよう な使命は歴史、つまり時の流れを含 意する。召命は問いかけ、その場で の応答を要求する。一方で使命の遂 行はむしろ歴史的に行われる:それ は私たちがなるように呼ばれている 者になることによって、そして世界 を神が永遠から望んでいるものに変 えていくことによって。

### 教会における特有の使命

神は世を創造することによって、歴 史において使命が遂行される〈空 間〉を開いた。その使命とは、御父 によって世に遣わされ、人間の本性 を取り、創造の業を完成させ、人を 罪から贖い、御自身において彼らの 子としての完全な尊厳を回復させる 御言葉の使命である。また、御父と 御子によって世と歴史に遣わされ、 信じる者をキリストの体である教会 に集め、御子と一致させる聖霊の使 命である。イエス・キリストの教会 はこの二つの使命から生まれ、教会 は歴史におけるその使命の延長のよ うなものである(第二バチカン公会 議『教会憲章』2-4番参照)。全教 会は召集され、遣わされる:イエス による神の国の盲教によって召集さ れ、復活後、すべての人に福音を教 え父と子と聖霊の名によって洗礼を 授けるためにあらゆる国々に遣わさ れる。

教会はこの使命のために存在し、生きており、聖霊が歴史を通じて喚起する様々な使命も同じ任務に向かっている。地上の花々が多様で美しい。神が多くの聖人たち、無数のキリスト教共同体、信徒や司祭、修道者たちに委ねた使命も多様であい。それらの使命は教会の唯一の。使命に貢献し、貢献し続けている。

聖ホセマリアの生涯を知り、その説教に耳を傾けると、彼もまた神から一教会において、教会と共に一特定の使命を受けたことが理解できる。彼の聖性を宣言し、模範として示すことで、教導職は聖ホセマリアが受けた使命を教会自体の使命の一部として認めたのである。

司祭としての活動を始めて間もなく、聖ホセマリアは神から受けた使命に名前を与えたいと望んだ。それは彼の霊的な子たちが歴史の中でそれを継続できるようにするためである。オプス・デイ、神の業

(Operatio Dei)。彼は神のイニシアチブを強調し、1928年10月2日が「主がその業を創立した日」(『内的覚書』306番、1931年10月2日)であることを指摘し、その創立ついて語り始めた。

聖ホセマリアはオプス・デイの使命 を「岸のない海」と表現した。聖霊 によって人類の歴史の中で霊感を受けた特定の使命がどれほど幅広く一般的であろうと、創立には常にその目的を正当化する特異性がある。

新しい使命や創立の特異性を探求す るとは、聖霊によって霊感を受けた 他のイニシアチブからその特異性を 分離するということではなく、それ をよりよく理解するということであ る。したがって、オプス・デイの特 異性は、他者が行うことや行わない ことと対比して、それらから分離 し、差異を誇張し、行動の領域を分 割することによって定義することは できない。主のぶどう園で働く者た ちの特異性は、全教会の唯一の使命 から目を離すことなく、交わりを求 める一致の姿勢の中で際立たせるべ きである。

すべての創立には、特異性と伝統と の間、すなわち新しいものとキリス ト教のメッセージにおいて必然的に

同じであり続けるべきものとの間に おける繊細な関係が存在する。教会 がその生活と伝統の中で、キリスト から受けた使命において本質的であ ると認める任務がある。例えば、神 の民を聖性とイエス・キリストとの 一致へと励ますこと、すべての人に 子としての神との個人的な関係を持 つよう教えること、信者の生活の中 心に聖体を据えること、司祭たちが 罪を赦すための用意があるよう促す こと、実りがあるように秘跡を授け ること、洗礼を受けたすべての者が 福音化が必要な世界における使徒で あることを思い起こさせること、司 牧者たち、公会議、特にローマ教皇 の教えを広めること、などである。

聖ホセマリアが約一世紀前にオプス・デイを始めたときに経験した信仰をどのように理解するのか?そして彼はオプス・デイが含意する新しさをどのように理解したのか?

私たちはこれらの問いかけに向き合い、オプス・デイ創立100周年

(1928-2028)を準備するこの数年間、その使命を特徴づけるいくつかの特異性について再度考え、理解を深め、そして神がその使命を果たすためにオプス・デイのメンバーに絶えず与え続けているカリスマについて改めて考察したいと望んでいる。

## 「仕事を通じて世界を神に向かって 秩序づける」

できる:「仕事を通じて世界を神に 向かって秩序づける | あるいは「地 上のあらゆる現実の頂点にイエスの 十字架を据えることにより、それら が罪から清められ、すべての人間の 活動が内側から聖化され、〈キリス トの形〉を取るようにするし。聖ホ セマリアが指摘するように、この使 命においてオプス・デイのメンバー は「自らを聖化し、他者を聖化し、 世界そのものを聖化する」。司祭と 信徒はこの使命に貢献するが、両者 の関係を明確化することは重要であ る。つまり司祭は何より信徒に仕え るべきである。なぜならこの使命に 直に携わるのは信徒だからである (第二バチカン公会議『教会憲章』 31、36番参照)。

「何年も前からずっと説き続けてきましたが、これが聖性を得るための秘訣です。神が私たちをお呼びになったのは、神に倣うため、そして社会の直中に生きる人として、真面

目な活動すべての頂点に、私たちの 主キリストを据えるためなのです。 ここまで考えると、次の話がもっと よく分かるのではないでしょうか。 万一、自分の什事を愛さないとすれ ば、あるいは、聖化するために仕事 に真剣に取り組む責任感を感じない のなら、あるいは仕事への〈召命〉 を持っていないとすれば、私が話す 仕事の超自然的な意味を理解するこ とは決してできないでしょう。その 人には『働く者である』という不可 欠な条件が欠けているからです| (『神の朋友』58)。

オプス・デイの祈祷文であるプレチェスが、取り次ぎの祈り「Ad sanctum losephmariam, Conditorem nostrum(私たちの創立者、聖ホセマリアに)」において、そのメッセージの本質を数行で要約すべく、仕事の聖化に中心的な役割を与え、その使徒職的・宣教的な次元を明確にしている。「Intercede

pro filiis tuis, ut fideles spiritui Operis Dei, laborem sanctificemus et animas Christo lucrifacere quaeramus (あなたの子供である私 たちが、オプス・デイの精神に忠実 であり、仕事を聖化し、キリストの ために人々を獲得しようと望むよう に、取り次いでください)」。

実際、キリストにおける仕事という 軸を中心に、聖ホセマリアが創立に おいて見たその他すべてのキリスト 教的側面が、回転しているように思 える。例えば、日常生活の中で神と 出会い聖性を求める可能性、聖性へ の呼びかけの普遍的な広がり、イエ スの隠れた生活とナザレの聖家族の 模倣、大工・労働者である聖ヨセフ への特別な信心(それはメンバーが この聖人の祝日に自らのオプス・デ イへの奉献を更新するほどであ る)、聖霊においてすべてのものを 御父と和解させる御子の使命への参 与としての神の子として在り方、メ

ンバーが仕事仲間や社会的関係において実践するように召されている友情と信頼の使徒職、地上で人々が働いている限り続くオプス・デイの永続性…。これらすべての側面は「人間の仕事の神的次元に対する新たな理解」という焦点を持つ創立の光の反射である。

上述したような使命の特異性がオプ ス・デイのカリスマなのだろうか? 召命、使命、カリスマの三者の関係 はどのようなものだろうか?聖書と 教会の歴史において、「カリスマ」 という用語は非常に広い意味を持っ ている。しかし、主に「使命のため に神によって与えられた賜物」を指 す。この意味において、召命と使命 というダイナミズムはカリスマとい う概念に先立つ。神の御言葉は、使 命を委ねるために呼びかける。その 後、神はその使命を遂行するために 必要なカリスマと賜物を授ける。ま た時に一般的な表現では、カリスマ

という言葉は、使命や特定の霊性の 無償性を指すためにも用いられ、それが霊の賜物、神のイニシアチブで あることを表している。すなわち、 喚起し、呼びかけ、恵みを与え、助 け、導き、父として人間の応答を求 めるのは神であるということであ る。

「私たちの主なる神が、人々のために何らかの業を計画されるとき、のまず第一に道具として用いる人適切なとを考えられ…そして彼らにププスられます。このオージスを伝えられます。このオージスを伝えられます。ことであるとであるとであるとでも強い熱意と愛を払っても強い熱意と変を払っても強い熱意と変を払ってもない実現するために犠牲を払うに表す」(『指針』1934年3月19日、48-49番)。

神が人々に恵みと霊のカリスマを与えるのは、私たち全員が召された使

また、オプス・デイの使命はその組織制度に先立つことを忘れてはは神でことを忘れては、 原則としてこの使命は、 るでままたとを実践する限り、現在またはるととを可能にする限力の制度形態ととなる。神が創立者に求めたことととなる。 世界のただ中で聖性とはがとの充満を求め、 世界のたがの大間のたがとの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序づけ、それらの活動を神に秩序ではない。

に〈キリストの形〉を与えるという ことである。

最後に、オプス・デイの使命を理解 し深めることは、ある意味で尽きる ことのない探求である。なぜなら、 それは神を〈著者〉とする真に神学 的な現実であるからだ。それは歴史 に開かれ、創造主である聖霊によっ て励まされており、したがって様々 な時代や状況に対応することができ る使命である。それは、歴史を通じ て、非常に多様な状況の中で多数の 人々によって具現化されるカリスマ である。使命の聖霊論的次元は、そ れを具現化する人々の在り方と生き 方が、文字ではなく霊(spirit)とし て定義されることを可能にする。だ からこそ、オプス・デイは精神 (spirit)、すなわち「オプス・デイ の精神」を持つ。

この使命と精神の意味を、聖ホセマリアが個人的な黙想で見出し、その

説教で伝えたように深く掘り下げる ことが、次の記事の目的となる。

このシリーズはジュセッペ・タンゼ ラ=ニッティ教授によってコーディ ネートされ、その協力者には教皇庁 立聖十字架大学の先生が数名が含ま れています。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/100shunen-heno-michi1/(2025/12/11)